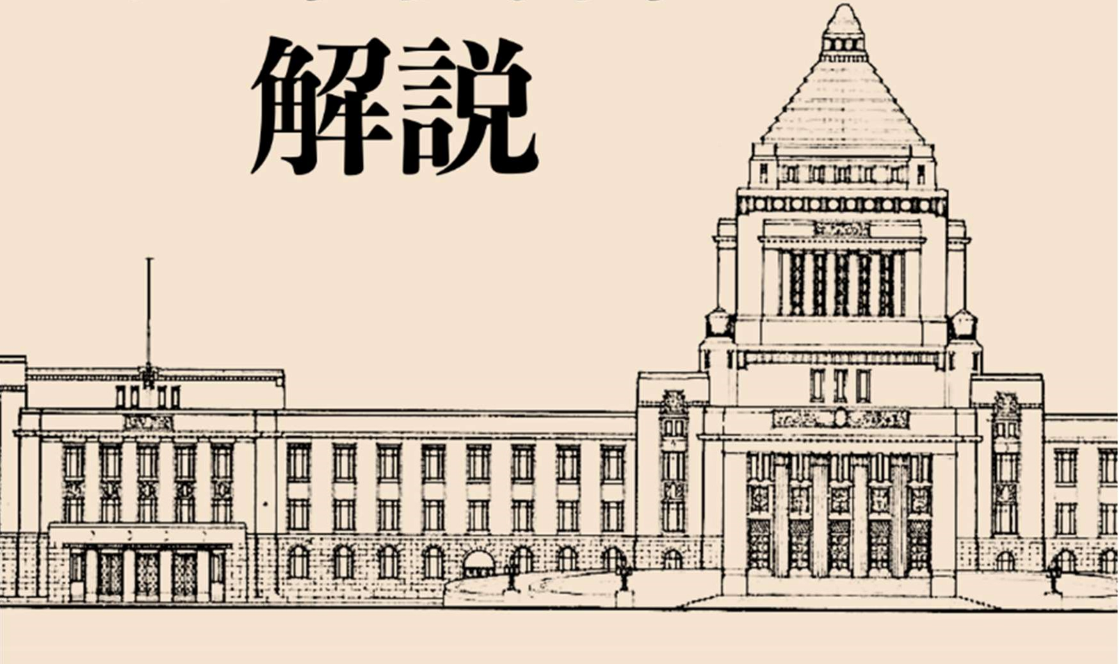
議会開設百三十年記念

「議会」誕生！

~我が国議会政治の原点をさぐる~

展示資料解説



▶本展示会について

今から 130 年前の明治 23(1890)年 11 月 29 日、日本で初めての議会が開設されました。

本展示会では、議会制度ができるまでの動き、議会開設に関わった人々の著作や伝記などの資料、議事堂竣工の歴史を、東京本館憲政資料室が所蔵する歴史的資料 11 点に関西館所蔵資料等を加え、全 40 点により紹介します。

第 1 章及び第 3 章は、東京本館で昨年 12 月に開催された「議会開設百三十年記念議会政治展示会」をもとにした構成で、第 2 章は関西館でのみご覧いただける展示になります。普段は直接見ることができない貴重な資料を、ぜひ関西館でお楽しみください。

▶目次

第 1 章　胎動　～議会制度ができるまで～ 4

第 2 章　英傑　～激動の時代を駆け抜けた人々～ 9

第 3 章　殿堂　～帝国議会議事堂の誕生～ 13

第 2 章に登場した人々 19

▶凡例

・展示の順番にしたがって資料の情報を掲載しています。

・【】内に国立国会図書館請求記号・所蔵機関を記載しています。

・★印は国立国会図書館ホームページに掲載されています。公開範囲は資料により異なります。各資料の書誌情報に付した以下の表示をご確認ください。

史料　電子展示会「史料にみる日本の近代」
（インターネット公開）https://www.ndl.go.jp/modern/

デジ　国立国会図書館デジタルコレクション
（インターネット公開）https://dl.ndl.go.jp/

デジ送信　国立国会図書館デジタルコレクション
（図書館向けデジタル化資料送信サービス[1]で利用可能）

帝国議会会議録検索システム　帝国議会会議録検索システム
（インターネット公開）https://teikokugikai-i.ndl.go.jp/#/

館内の端末からはすべて閲覧可能です。閲覧するには国立国会図書館オンライン（ https://ndlonline.ndl.go.jp/ ）で、資料の請求記号やタイトル等により資料検索を行い、検索結果の画面で「デジタル」のボタンをクリックしてください。または、国立国会図書館デジタルコレクション（ https://dl.ndl.go.jp/ ）で、ご覧になりたい資料の請求記号やタイトル等により資料検索を行ってください。

---

1 詳細については当館ホームページをご参照ください。
https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/index.html

第１章　胎動　～議会制度ができるまで～

公議政体は幕末から構想されていたが、明治政府は、「五箇条御誓文」において広く会議を興すことを声明した。近代化を進める中で、公議所をはじめ議事機関の設置も試みられた。また、民衆の政治意識も高まり、自由民権運動が全国的に拡大、各地の民間政社により、国会開設・憲法制定の要求が行われた。

その後、明治 23（1890）年の議会開設が決定されて議事堂建築が始まるとともに、明治 22（1889）年には大日本帝国憲法が発布された。

★1-1.　新政府綱領八策（坂本龍馬自筆）

慶応 3（1867）年 11 月

慶応 3 年 10 月、前土佐藩主山内豊信（容堂）の建白により、幕府から朝廷へ政権が返上された（大政奉還）。展示資料はその翌月に作成された、龍馬自筆の政体案（直柔（なおなり）は龍馬の実名）。内容は新政府における官制、法制、外交、議会制度などに関する提言で、大政奉還の建白書に通じる。

新政府綱領八策（複製）
慶応 3（1867）年 11 月【憲政資料室収集文書 1462】

史料　デジ

1-2.　幕末期の議会運営規則案

慶応 3（1867）年 12 月（推定）

幕末期の議会運営規則案。上下両院の設置や諸藩以外からの人材登用を提案し、イギリス議会に倣う議席配置図を描く。明治文化研究者の尾佐竹猛（おさたけたけき）は、これを坂本龍馬、後藤象二郎、福岡孝弟（たかちか）らに近しい者が「新政府綱領八策」と同時期に起草したものと推定している。

議事院規則案
慶応 3（1867）年 12 月【憲政資料室収集文書　1116】

★1-3. 明治政府の基本方針

慶応 4（1868）年 3 月

新政府軍と旧幕府軍との戦闘（戊辰戦争）が続く中、新政府は「御誓文」を作成。天皇が中心となって広く会議を興し、公論に基づく政治を行う旨を天地神明に誓う形式をとった。「五箇条御誓文」として知られている。展示資料は太政官正院印書局（国立印刷局の前身）による明治初期の発行と推定される。浄書の筆を執った巌谷修は、明治期の官僚・政治家。一六（いちろく）と号し、書家としても名高い。

『御誓文』
巌谷修著　正院印書局【特 44-816】

デジ

★1-4. 明治政府の政治組織法

慶応 4（1868）年閏 4 月

「五箇条御誓文」に基づき、太政官を中心とした官制を定めたもの。東洋古来の法制資料に加え、アメリカ合衆国憲法や福沢諭吉の『西洋事情』などを参考に作成され、立法・行政・司法の三権分立や、官吏公選の考え方を取り入れている。

政体
慶応 4（1868）年閏 4 月【CZ-211-04】

デジ

★1-5. 公議所法則案

明治元（1868）年 12 月

明治政府の議事機関、公議所の運営規則集。「五箇条御誓文」第 1 条「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」を制度として実現するため、慶応 4（1868）年閏 4 月設置の議政官下局に次いで、明治元年 12 月に公議所の新設が決定された。

公議所法則案
明治元（1868）年 12 月【特 70-369】

デジ

★1-6. 民撰議院設立建白書（草稿三種）　明治 7（1874）年 1 月

明治 6 年に征韓論をめぐる政変で下野した板垣退助らは、日本初の政党である愛国公党を結成し、「民撰議院設立建白書」を政府に提出した。起草者は英国帰りの古沢滋で、一部高官のみにより意思決定が行われている現状を批判し、国会を開設して世論を反映した政治を行うよう主張している。

〔民撰議院設立建白書草稿（三種）〕
明治 7（1874）年 1 月【古沢滋関係文書 13】

史料　デジ

パネル

1-7. 民撰議院設立建白書（政府への提出版）　明治 7（1874）年 1 月

左院（明治初期における政府の立法諮問機関）に提出された民撰議院設立建白書。左院の機関紙的存在であった、ブラック（John Reddie Black）主宰の新聞『日新真事誌』に掲載されて広く知られることとなり、自由民権運動へとつながっていった。

民撰議院設立建白書
明治 7（1874）年 1 月【国立公文書館所蔵】

★1-8. 立憲政体樹立の詔　明治 8（1875）年 4 月 14 日

明治 8 年の大阪会議において、明治 6 年の政変で下野した板垣退助らと政府側の大久保利通・伊藤博文らとの間に合意が成立、漸進的に立憲政体に移行するという詔書が発せられた。展示資料はその草案。この詔は明治 10 年代の自由民権運動において、国会開設要求の根拠となった。

史料　デジ

御詔勅草案
明治 8（1875）年 4 月 14 日【伊藤博文関係文書（その 1）　書類の部 47】

★1-9. 国会開設の要望書

明治 13（1880）年 4 月

大阪会議後、板垣退助は旧愛国公党同志に呼び掛け、政治結社愛国社を設立した。愛国社は一時自然消滅するが、立志社により再興され、全国の政社が加盟する大きな結社に成長した。明治 13 年 3 月の愛国社の第 4 回大会では国会期成同盟が結成され、政府に国会開設の要望書を提出したが、受理を拒否された。

国会ヲ開設スル允可ヲ上願スル書・国会ヲ開設スル允可ヲ上願スル書副願
明治 13（1880）年【河野広中関係文書　書類の部　168・169】

史料　デジ

パネル

1-10. ついに国会開設へ

明治 14（1881）年 10 月 12 日

国会開設及び憲法の制定に関し、政府内では大隈重信らの急進派と伊藤博文らの漸進派が対立していた。開拓使官有物払下問題を理由に大隈らは政府を追放され（明治 14 年の政変）、その翌日、欽定（きんてい）憲法の制定及び明治 23 年の国会開設を宣言する勅諭が出された。

国会開設之勅諭
明治 14（1881）年 10 月 12 日【国立公文書館所蔵】

1-11. 頻発する農村での蜂起 ー自由民権運動の波及ー

明治 15（1882）年～明治 17（1884）年

自由民権運動の影響下、政府のデフレ政策により困窮した農民が各地で蜂起し、激化事件と呼ばれた。展示資料は、特に大規模であった秩父事件（明治 17 年 10 月 31 日から 11 月 9 日までにかけ数千人が蜂起）の残党に関する報告書で、9 月に起きた加波山事件で襲撃の対象となっていた、栃木県令三島通庸（みちつね）に提出されたもの。

秩父事件調査復命書
明治 17（1884）年 11 月 12 日【三島通庸関係文書　510-7】

★1-12. 大日本帝国憲法の草案

明治 21（1888）年 3 月

憲法の起草は、伊藤博文らを中心に明治 19 年 11 月頃から開始され、井上毅（こわし）、ドイツの法学者レースラー［ロエスレル］（Karl Friedrich Hermann Roesler）らの案をもとに討議を重ねた。展示資料は明治 21 年 3 月に各条の検討結果を反映させ改めて浄写した草案で、表紙に「博文」の自署、文中に伊藤による修正、書き入れがある。

史料　デジ

大日本帝国憲法（浄写三月案）
明治 21（1888）年 3 月【伊藤博文関係文書（その 1）　書類の部 233】

パネル

★1-13. 憲法発布式

明治 22（1889）年 2 月 11 日

明治 22 年 2 月 11 日に行われた大日本帝国憲法発布式の様子を描いた 3 枚続きの大判錦絵（展示パネルは 3 枚を組み合わせた状態）。宮中正殿の玉座に明治天皇、その右手に皇后が座り、正面には黒田清隆首相以下諸大臣が整列している。天皇から首相に憲法を授ける欽定（きんてい）憲法の形式をとっている。

「憲法發布式之圖」
井上探景画　松木平吉　明治 22（1889）年 2 月【寄別 7-2-2-3】

デジ

★1-14. 憲法発布に際しての黒田首相演説（超然主義の表明）

明治 22（1889）年 2 月 12 日

憲法発布翌日の明治 22 年 2 月 12 日、黒田清隆首相が地方長官に対して行った演説の原稿。翌年に迫った議会開設の際に政府がとるべき態度として、「常に一定の政策」をとり、「超然」として政党の外に立つ、と全ての政党から一定の距離をとることを宣言した。

憲法発布ニ際シテノ黒田首相演説
明治 22（1889）年 2 月【牧野伸顕関係文書 書類の部 84】

史料

第 2 章　英傑　～激動の時代を駆け抜けた人々～

　議会開設については、当時の知識人、政府内の関係者、民権運動家など、さまざまな人物が語っている。合議体による立憲制導入をいち早く主張したもの、　内政や外交について論じたものや、清朝の外交官が当時の日本の状況を紹介した著作もある。

　また、議会開設までとそれ以後の、多様な立場の人物の伝記類が残されている。間接的な政治風刺をこめた小説の形をとることもあれば、対象となる人物に長く親しく接した人物ならではの挿話が書き込まれることもあった。政府の要職を占めた人物の伝記は、広範な資料収集とともに、同時代の政治史の叙述となっている。

★2-1. 加藤弘之による立憲政体の国のあり方を説いた啓蒙書

明治 3（1870）年

　天賦人権論の立場に立ち、臣民の生命、権利、私有を保護するために、まず第一に憲法が必要であると説いた。ただし、加藤はその後思想的立場を変じたため、明治 14 年に自ら本書を絶版に処した。

『真政大意』
加藤弘之著　山城屋佐兵衛　明治 3（1870）年【311-Ka617s】　デジ

★2-2. 福沢諭吉の内政論・外交論を集めた著作

明治 14（1881）年

　明治 14 年初頭、福沢は大隈重信・伊藤博文・井上馨らから国会開設準備のための政府機関紙発行を持ちかけられ、その準備にあたっていた。そのため政府批判の度合いを強める民権派に対しても距離を置いた言論を展開している。大隈が明治 14 年 10 月の政変で失脚したため、福沢の構想が実現することはなかった。

『時事小言』
福沢諭吉著　山中市兵衛等　明治 14（1881）年 9 月【特 70-251】　デジ

★2-3. 左院少議官・宮島誠一郎の意見書集　明治 38（1905）年

展示箇所の「立国憲議」は、明治 5 年、政府人民間の権利・義務を定める基本法令として国憲を制定することの重要性を述べ、新たな議事機関として暫定的に諸省長官・府県官員からなる議院を創設することを提案したもの。板垣に先立つ政府部内の議院の提唱として注目される。

『国憲編纂起原』
宮島誠一郎著　元真社　明治 38（1905）年 12 月【22-358】

デジ

2-4. 清朝の外交官・黄遵憲によって書かれた日本紹介の書　1887 年

『日本國志』は 1887 年に完成。歴史編には明治維新後大久保暗殺までの過程を収める。日清戦争後に、立憲制導入を目指した康有為・梁啓超の活動に理論的根拠を与えたともいわれる。展示資料は上海古籍出版社から 2001 年 2 月に発行されたもので、1897 年刊行のものを底本とした影印本。

『日本國志』
(清）黄遵憲撰　上海古籍出版社　2001 年 2 月【GB648-C14】

★2-5. 坂本龍馬についての伝記小説　明治 16（1883）年

新聞記者・坂崎鳴々道人（本名は斌（さかん)、ほかに紫欄とも号す）によって書かれた。展示資料は、高知の民権派の新聞『土陽新聞』に連載された。当時、政府の弾圧によって新聞の発行停止が相次いだため、坂崎が自由民権の理想を坂本龍馬に託して著した政治小説の一種ともされる。以後坂崎は維新史の研究に従事し、坂本龍馬に関する著作を多数著した。展示番号 2-6『坂本龍馬』は片桐開成社より明治 42 年 3 月に発行されたもの。

『汗血千里駒（かんけつせんりのこま)』
坂崎鳴々道人（斌)著　雑賀柳香（豊太郎)補　摂陽堂
明治 16（1883）年【特 41-919】

デジ

★2-6. 坂本龍馬についての伝記小説

明治 42（1909）年 3 月

新聞記者・坂崎鳴々道人（本名は斌（さかん）、ほかに紫欄とも号す）によって書かれた。展示番号 2-5『汗血千里駒（かんけつせんりのこま）』（摂陽堂発行）は、高知の民権派の新聞『土陽新聞』に連載された。当時、政府の弾圧によって新聞の発行停止が相次いだため、坂崎が自由民権の理想を坂本龍馬に託して著した政治小説の一種ともされる。以後坂崎は維新史の研究に従事し、坂本龍馬に関する著作を多数著した。展示資料は片桐開成社より明治 42 年 3 月に発行されたもの。

『坂本龍馬』
坂崎鳴々道人著　雑賀柳香補綴　片桐開成社
明治 42（1909）年 3 月【32-389】

デジ

★2-7. 岩倉具視の伝記

明治 39（1906）年 9 月

太政官大書記官多田好問（こうもん）を編纂主任として、明治 39 年に刊行された。岩倉の誕生から死までを扱っているが、関係史料を広く網羅した幕末明治初期の政治史となっている。戦後、明治百年史叢書として復刻され、岩倉研究の基本資料となっている。

『岩倉公実記　下巻　2』
多田好問編　香川敬三閲　皇后宮職　明治 39（1906）年 9 月　【34-282】

デジ

★2-8. 木戸孝允が生前に遺した詩文集

明治 28（1895）年 4 月

タイトルにある松菊とは木戸の号のことである。亡くなる直前の明治 10 年の作には、西南戦争勃発に対する深い憂慮ともとれる一節がある。編者である木戸孝正は養子。

デジ

『松菊遺稿』
木戸孝允（松菊）著　木戸孝正編　木戸孝正　明治 28（1895）年 4 月【69-125】

★2-9. 板垣退助の伝記

明治 26（1893）年 9 月

　自由新聞社より発行された。本書には、戊辰戦争で各地を転戦した板垣の事績が記されている。巻末には戊辰戦争を戦った諸士の肖像を収める。著者の栗原亮一は明治時代の衆議院議員であり、板垣が内務大臣に就任した際は秘書官を務めた。また、宇田友猪（ともい）は民権派の言論人であり、後に『自由党史』の編纂にも関わった。

『板垣退助君伝 第 1 巻』
栗原亮一，宇田友猪著　自由新聞社
明治 26（1893）年 9 月【44-59】

デジ

★2-10. 伊藤博文の伝記

昭和 15（1940）年

　伊藤の生誕百年を記念し、金子堅太郎らを編者として編まれた。伊藤が著した書翰の翻刻等、史料を多数掲載し、岩倉公実記と同様、伝記でありながら、伊藤が生きた時代の政治史の叙述となっている。戦後、明治百年史叢書として復刻され、伊藤研究の基本資料となっている。

『伊藤博文伝 中』
春畝公追頌会編　春畝公追頌会
昭和 15（1940）年【289-I892-3 ウ】

デジ送信

第 3 章　殿堂　～帝国議会議事堂の誕生～

現・国会議事堂は大正 9（1920）年に着工、竣工までに 17 年もの歳月を要したものである。議事堂を永田町に置くことが政府内で決まったのは明治 20（1887）年 4 月であったとされる。しかし、ドイツ人建築家の構想に基づく本格的な“本”議事堂を建てる計画は頓挫、日比谷の“仮”議事堂時代は実に 50 年近くに及んだ。その間も、調査会などにおける議論は断続的に行われ、地道な石材調査、土地取得なども進められた。デザインの一般競技をめぐる建築界の論戦など紆余曲折を経て、昭和 11（1936）年竣工の現在の議事堂がある。

パネル

★3-1.　予想された議事堂　その 1

明治 21（1888）年 7 月

第 1 次仮議事堂竣工（明治 23 年 11 月 24 日）前の明治 21 年に出版された石版画。架空の国会議事堂の前に、板垣退助、榎本武揚、大隈重信、勝海舟を思わせる 4 人が立つ（いずれも薩摩・長州以外の出身者）。発行者の荒川藤兵衛は江戸以来の版元山口屋藤兵衛。明治 20 年代には、名所の風景やニュース性のある出来事を描いた石版画（額絵）が盛んに刷られた。

デジ送信

「國會議事堂之圖」（『憲法発布式等之図』所収）
荒川藤兵衛画　荒川藤兵衛　明治 21（1888）年 7 月【寄別 7-5-1-5】

3-2.　予想された議事堂　その 2

明治 22（1889）年 4 月

第 1 次仮議事堂の予想図。完成の前年に発行されたため、中央には実際の建物にはない塔がある。図の下には担当する技師、内部の構造、建築費などの情報が記されている。

大日本国会仮議事堂図
明治 22（1889）年 4 月
【憲政資料室収集文書　1301】

★3-3. 議会の所在地に永田町が選ばれた理由

明治 19 (1886) 年 5 月

議事堂を置く場所として永田町が秀でている理由を述べた文献。文中にある「フリマン」は当時議事堂を含む官庁集中計画を立案していたドイツ人建築家ベックマンを指すと考えられる。永田町を本格的な議事堂を置く場所とすることは、その後、明治 20 年 4 月の閣議で定まったとされる。

「雑報　国会議事堂」『東京輿論新誌』239 号
嚶鳴社　明治 19（1886）年 5 月【雑 54-107】

デジ送信

3-4. れんが製造器の購入について、臨時建築局副総裁への手紙

明治 19（1886）年 6 月 26 日

議事堂建築のために来日したドイツの建築家が、日本製れんがの製造法には改良が必要と指摘した。このことを知った実業家西村勝三が、ベルリンから三島通庸（翌月に臨時建築局副総裁に就任）に宛てた手紙。西村は耐火れんが製造工場の視察のために渡欧中で、自分が調べた仏独のれんが製造器などについての情報提供を申し出ている。

西村勝三書簡　三島通庸宛
明治 19（1886）年 6 月 26 日【三島通庸関係文書 234-1】

3-5. 日比谷の仮議事堂

明治 20（1887）年 8 月 22 日

日比谷に議事堂建設の報を受け、新道の建設や道幅の拡幅を提案する書簡。送り主町田実一は在漢口（清国）領事。井上馨臨時建築局総裁の下で議事堂を含む中央官庁の整備計画を担当していた三島通庸副総裁に宛てられたもの。

町田実一書簡　三島通庸宛
明治 20（1887）年 8 月 22 日【三島通庸関係文書 168-1】

★3-6. 議事堂の建築はいかにあるべきか

明治 24（1891）年

　当時貴族院書記官長だった金子堅太郎が、理想の議事堂建築について、歴史・文化の象徴性から音響効果、座席の配置や必要な設備まで、多角的に論じたもの。提唱されているもののうち、外国の事例の研究や設計案の公募などは、後年実現されることになる。

『議院建築意見』
金子堅太郎著　金子堅太郎　明治 24（1891）年【18-241】

デジ

パネル

★3-7. 議事堂建築ニ関スル建議案（横井時雄外 3 名提出）

明治 39（1906）年 3 月

　第 2 次仮議事堂の老朽化により、3 か年計画で修繕が予定されていたが、修繕を経ても 10 年程度しか耐久性がないとの見通しにあった。そのような見通しを基に、“本”建築を行いたいとの建議案が衆議院に提出され、可決された。委員会では、我が国の立憲政治が「大磐石」であることを示すためにも「雄大壮麗」な永久に耐える議事堂の建築が必要との趣旨が説明されている。明治 43 年 5 月には大蔵省に議院建築準備委員会が設置された。

第 22 回帝国議会　衆議院　帝国議会議事堂建築に関する建議案委員会　第 1 回
明治 39 年 3 月 26 日
（帝国議会衆議院委員会議録　衆議院事務局【BZ-7-11】）

帝国議会会議録
検索システム

★3-8. 海外の議事堂の調査

　議事堂の建築にあたっては、海外の事例も参考とされた。著者の大熊喜邦は明治 40 年代から大蔵省で議事堂建築の調査、設計に携わっていた。展示資料は、海外の議事堂について、本会議場の勾配、照明、音響の効果などの様々な研究の成果をまとめたもの。

『世界の議事堂』
大熊喜邦著　洪洋社　大正 7（1918）年【365-142】

デジ

★3-9. 木材や石材の基礎的な調査

明治 42（1909）年度～明治 45（1912）年度

議事堂には、24 種の木材、内外装に約 40 種（377,926 切）の石材が用いられている。国産の材料を使う方針の下に集められた 88 種の樹種に上る各地の木材標本や 1,200 点にも上る石材標本は関東大震災により灰燼に帰したが、調査の成果が多様な石材や木材の使用につながった。

「第 1 編木材之部」『建築用本邦産木材及石材』
大蔵省臨時建築部編　建築世界社　大正 3（1914）年【342-480】

デジ

★3-10. 議院建築調査会による議論の本格化

大正 6（1917）年 9 月 11 日

大正 6 年に大蔵省に設置された議院建築調査会においては、部屋割りについても詳細な議論が交わされた。展示箇所は、当時貴族院書記官長であった柳田国男が図書館や書庫の面積を広げるよう強く要求する部分と部屋数の案。

『議院建築調査会報告書』
大蔵大臣官房臨時建築課〔編〕大蔵大臣官房臨時建築課
大正 7（1918）年【368-18】

デジ

『議院建築調査会報告書附属議事速記録』
大蔵大臣官房臨時建築課〔編〕大蔵大臣官房臨時建築課
大正 7（1918）年【368-18】

デジ

★3-11. 議院建築の意匠の懸賞図案

大正 9（1920）年

　本建築のための議院建築意匠設計の応募には 118 案が集まった。第 1 次審査（大正 8 年 2 月締切り）では 20 案が当選とされ、第 2 次審査（同年 9 月締切り）では 1 等、2 等、3 等（1 席・2 席）が定まった。第 1 等（宮内省技手・渡邊福三）らの当選図案は参考とされたが、実際の設計は大蔵省の外局である営繕管財局が担った。なお、長年コンペ方式（懸賞競議）を主張した建築家・辰野金吾は審査委員を務めたが、スペイン風邪により第 1 次当選発表の直後に死去した。

『議院建築意匠設計競技図集』
洪洋社編　洪洋社　大正 9（1920）年【422-13】

デジ

★3-12. 議院建築の敷地予定図

大正 10（1921）年頃

「議院建築予定敷地地形図」
『営繕管財局営繕事業年報』 第 1 輯（大正 14 年度）
営繕管財局編　営繕管財局　昭和 9（1934）年【14.5-403】

デジ

★3-13. 俳人・高浜虚子が見た議事堂の建築風景

昭和 2（1927）年 3 月 22 日

　昭和 2 年に『東京日日新聞』で連載された『大東京繁昌記』は、当時の著名作家らが東京各所の風景をテーマに寄稿したものである。丸の内を担当した虚子は、関東大震災からの復興半ばの街の向こうに議事堂の鉄骨を眺め、「何となく心強いやうな感じがする」と書き記した。

高濱虚子「丸の内」『大東京繁昌記　山手篇』
東京日日新聞社〔編〕　春秋社　昭和 3（1928）年【578-192】

デジ送信

★3-14. 議事堂の竣工記念誌

昭和 11 (1936) 年 11 月

仮議事堂時代から現在の議事堂完成までの紆余曲折がまとめられている。技術の粋を集めた設備や意匠、建築素材の産地なども誇らかに紹介されており、竣工を迎える興奮を伝えている。竣功式の出席者等に配布され、昭和天皇にも桐箱に納めて献上された。

デジ

『帝国議会議事堂建築の概要』
営繕管財局編纂　大蔵省営繕管財局　昭和 11(1936)年 11 月　【KA272-E15】

★3-15. 議事堂の図面

この報告書は竣工当時の議事堂の建築過程や図面、写真を収録した貴重な資料集となっている。

『帝国議会議事堂建築報告書〔附図〕』
〔大蔵省〕営繕管財局編　営繕管財局　昭和 13（1938）年【758-145】 デジ送信

★3-16. 議事堂の竣功式典

昭和 11（1936）年 11 月

新議事堂の落成式は昭和 11 年 11 月 4 日から 1 週間かけて豪華に執り行われた。4 日の修祓式（しゅばつしき）（使用前のお祓いの儀式）に始まり、5 日に天皇行幸、7 日に竣功式と祝賀会、そして 9 日、10 日には関係者 1 万 5 千人による参観が行われた。

デジ送信

『帝国議会議事堂竣功式典記録』
大蔵省営繕管財局編　大蔵省営繕管財局　昭和 12（1937）年　【731-37】

第2章に登場した人々

　ここでは、第2章　英傑 ～激動の時代を駆け抜けた人々～　に登場した人物を、電子展示会「近代日本人の肖像」に基づいて（(*) ただし、宮島誠一郎を除く）、資料の展示順にご紹介いたします。

加藤弘之

かとうひろゆき

天保7年6月23日～大正5年2月9日　(1836～1916)

兵庫生まれ。政治学者。父は出石藩士。佐久間象山、大木仲益(のち坪井為春)らに入門、蘭学を学ぶ。蕃書調所教授手伝となりドイツ学を研究。明治維新後政府へ出仕、外務大丞等を歴任。明治10年(1877)東京大学法・理・文学部綜理、14年(1881)東京大学綜理。元老院議官、帝国大学総長を歴任し、23年(1890)貴族院議員勅選。33年(1900)男爵。帝国学士院長、枢密顧問官。著書は前期に『真政大意』(1870)、『国体新論』(1874)、天賦人権論から社会進化論に転向後の後期に『人権新説』(1882)。

福沢諭吉

ふくざわゆきち

天保5年12月12日～明治34年2月3日　(1835～1901)

大阪生まれ。明治の代表的な啓蒙思想家。父は中津藩士で、福沢が生まれた当時は大阪の蔵屋敷詰であった。父の死後中津に戻り、白石常人に師事し、その後大阪に出て、緒方洪庵に蘭学を学ぶ。万延元年(1860)から慶応3年(1867)にかけて幕府の

遣欧米使節に3度参加し､『西洋事情』等の著作を通じて欧米文化を紹介した｡4年(1868)慶応義塾を創設｡明治以降官職に就かず､位階勲等を受けなかった｡『学問のすすめ』(1872)､『文明論之概略』(1875)など多数の著作を発表した｡

大隈重信

おおくましげのぶ

天保9年2月16日～大正11年1月10日　(1838～1922)

佐賀生まれ｡政治家｡父は佐賀藩士｡尊皇攘夷派志士として活躍｡維新後､外国事務局判事などを経て､明治3年(1870)参議となる｡6年(1873)大蔵省事務総裁､ついで大蔵卿に就任｡征韓論争後､財政の責任者として大久保利通を補佐した｡明治14年の政変で失脚｡15年(1882)立憲改進党を組織､東京専門学校(早稲田大学の前身)を創立｡第1次伊藤､黒田両内閣の外相として条約改正に関与｡第2次松方内閣の外相兼農商務相｡31年(1898)憲政党を組織､首相に就任した｡40年(1907)政界を引退したが､のち復帰｡大正3年(1914)再び首相となる｡

宮島誠一郎

みやじませいいちろう

天保9年7月～明治44年3月（1838～1911）

幕末-明治時代の武士､官僚｡出羽(でわ)米沢藩(山形県)藩士｡戊辰(ぼしん)戦争のとき､藩命により雲井竜雄らと京都で和平工作にあたる｡維新後は新政府につとめ､宮内省爵位局主事をへて貴族院議員｡遺著に「戊辰日記」など｡明治44年3月15日死去｡74歳｡号は栗香､養浩堂｡

（＊）内容は「日本人名大辞典」（講談社　2001）、肖像は「養浩堂詩鈔」（善隣書院　1940）による。

大久保利通

おおくぼとしみち

天保元年 8 月 10 日～明治 11 年 5 月 14 日　(1830～1878)

鹿児島生まれ。政治家。明治維新の指導者。島津久光のもとで公武合体運動を推進。やがて討幕へと転じ、薩長連合を成立させる一方、岩倉具視らと結んで慶応 3 年(1867)12 月、王政復古のクーデターを敢行。版籍奉還や廃藩置県を推進し、新政府の基礎を固める。参議、大蔵卿を経て明治 4 年(1871)特命全権副使として岩倉遣外使節団に随行。帰国後、内政整備を主張し、征韓派参議を下野させるとともに、参議兼内務卿となり、政権を掌握。地租改正、殖産興業の推進など、重要施策を実行した。西南戦争に至るまでの各地の士族反乱を鎮圧するも、11 年(1878)士族に暗殺される。

坂本龍馬

さかもとりょうま

天保 6 年 11 月～慶応 3 年 11 月 15 日　(1835～1867)

生年が天保 6 年(1835)10 月とする説もある。高知生まれ。父は高知藩の郷士。嘉永 6 年(1853)江戸の北辰一刀流千葉定吉に師事。剣士として知られる。文久元年(1861)武市瑞山が結成した土佐勤王党に参加。2 年(1862)脱藩して江戸へ出、勝海舟の門下生となり、神戸海軍操練所建設に尽力。慶応元年(1865)長崎の亀山に社中(のちの海援隊)を開く。薩長連合締結に努力し、2 年(1866)西郷隆盛と木戸孝允の盟約に立ち会った。3 年(1867)6 月後藤象二郎と長崎から海路上京する船中で、独自の国家構想である「船中八策」をまとめた。同年 11 月中岡慎太郎と共に京都で暗殺された。

岩倉具視

いわくらともみ

文政 8 年 9 月 15 日～明治 16 年 7 月 20 日　(1825～1883)

京都生まれ。公卿、政治家。父は権中納言堀河康親。岩倉具慶の養嗣子。安政元年(1854)孝明天皇の侍従となる。5 年(1858)日米修好通商条約勅許の奏請に対し、阻止をはかる。公武合体派として和宮降嫁を推進、「四奸」の一人として尊皇攘夷派から非難され、慶応 3 年(1867)まで幽居。以後、討幕へと転回し、同年 12 月、大久保利通らと王政復古のクーデターを画策。新政府において、参与、議定、大納言、右大臣等をつとめる。明治 4 年(1871)特命全権大使として使節団を伴い欧米視察。欽定憲法制定の方針を確定し、また皇族、華族の保護に力を注いだ。

木戸孝允

きどたかよし

天保 4 年 6 月 26 日～明治 10 年 5 月 26 日　(1833～1877)

山口生まれ。政治家。父は萩藩の藩医。吉田松陰に師事。のち江戸で剣術、西洋兵学を学ぶ。公武合体派に反対し、尊皇攘夷運動に奔走。藩の重職に就き、藩論を討幕へと導く。慶応 2 年(1866)鹿児島藩との間に薩長連合を締結。王政復古のクーデター後、五箇条の誓文草案を起草。参与に任ぜられ、版籍奉還の実現に尽力した。明治 3 年(1870)6 月参議。4 年(1871)岩倉遣外使節団に副使として参加。以後文部卿、内務卿、地方官会議議長、内閣顧問等を歴任。立憲制の漸進的樹立を唱えた。

板垣退助

いたがきたいすけ

天保 8 年 4 月 17 日～大正 8 年 7 月 16 日 （1837～1919）

高知生まれ。政治家。高知藩主山内豊信の側用人などをつとめるが、藩の公武合体路線と相容れず、討幕派と連携。戊辰戦争で活躍。明治維新後、高知藩の大参事となり、藩政改革を行う。明治 4 年(1871)廃藩置県を断行。参議となり、岩倉遣外使節団派遣後の留守政府をあずかるが、征韓論が入れられず 6 年(1873)に下野。翌年、ともに下野した後藤象二郎らと民撰議院設立建白書を政府に提出。愛国公党や立志社を設立、自由民権運動の先頭に立つ。14 年(1881)自由党の総理に就任。後に第 2 次伊藤内閣、第 1 次大隈内閣の内相をつとめた。

伊藤博文

いとうひろぶみ

天保 12 年 9 月 2 日～明治 42 年 10 月 26 日 （1841～1909）

山口生まれ。政治家、元老。父林十蔵は萩藩の下級藩士の養子となり、以後伊藤姓を名乗る。吉田松陰に師事し、松下村塾に学ぶ。木戸孝允、高杉晋作らと共に尊皇攘夷運動に挺身。明治 4 年(1871)岩倉遣外使節団に特命副使として参加。大久保利通の信頼を得る。大久保の死後内務卿を継ぎ、政府の中心的位置を確保。15 年(1882)憲法調査のため渡欧。18 年(1885)内閣制度を創設し初代内閣総理大臣に就任。大日本帝国憲法の制定を指導。枢密院議長、貴族院議長、首相(4 度)、初代韓国統監等を歴任。42 年(1909)ハルビン駅頭で韓国の独立運動家安重根により暗殺される。

国立国会図書館関西館企画展示

議会開設百三十年記念

「議会」誕生！ ～我が国議会政治の原点をさぐる～

会期　令和3年2月18日(木)から3月3日(水)まで
(日曜・祝日は休館)

会場　国立国会図書館 関西館
地下1階 大会議室

発行　国立国会図書館
編集　国立国会図書館 関西館 資料展示班

国立国会図書館
National Diet Library, Japan